The Girl Whom the Spirits Loved : Alison Uttley and her `Fairy Tales'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中野, 節子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/4137

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

精霊に愛された少女
——A・アトリーと「妖精物語」——

中　野　節　子

. . . It was the house calling and calling her, drawing her back to it, and if she didn't answer she might be shut out for ever.

—*The Farm on the Hill* (1941), p. 236.

I　奨学金を受ける「女王」

町の学校から帰った最初の日，昼間の緊張から解放された少女は，家の裏山の頂上から眼下に広がる風景を眺め，今日一日の体験を思い出していた。知識欲に駆り立てられ，意気揚々と出かけて行った憧れのグラマー・スクールで，自分を迎えた校長先生の冷やかな態度。奨学金を受けて，汽車で通ってくるような少女は，ここでは決して歓迎されるような存在ではなかったのだ。奨学金を貰うことは決して名誉ではなく，かえって侮蔑の対象にしかすぎないことを，しっかりと思い知らされたのである。しかしこの日の夕方，学校から帰宅した少女は，見慣れた風景の中で，再び確認する。この丘の上に戻れば，自分は一国の女王であることを。「富める者には天国，有能な者には煉獄，貧しい者には地獄」と言われる国イギリスの社会において，労働者階級に生まれながら，その才能のゆえに，奨学金を受けて階級を脱してゆく者は，複雑な心境に追い込まれてゆく。すなわち彼らは，教育が用意した社会的な出世によって，仲間や家族の輪から離脱することを強いられ，有能な者としての煉獄の苦悩を背負いこまざるをえなくなるからである。少女もまた，その例にもれず，何人かの教師と学生たちから，自分は奨学金生徒であることを常に思い起こさせられ，うさん臭げな，横柄で恩きせがましい態度で扱われ続ける。こうして少女は，知的好奇心を満足させる代償に，地域共同体と家族の集団から切り離されるという苦痛を，身に沁みて感じさせられたのである。

A・アトリー（Alison Uttley: 1884-1976）という作家の作品をみるとき先ず気がつくことは，麗しく，芳しい自然讃歌の物語に登場する主人公たちのほとんど全てが，専ら人間以外の動物たちであり，彼らの形成するコミュニティーを描くものであることである。一方で，作家の実人生の人間関係のもつれは覆うべくもなく，終始ぎくしゃくしたものであり続けた。中でも二歳年下に存在したはずの弟の影は，不思議なほどに無視され，成人してから後には，作家と両親との間に親密な交流があったとは思われない。そしてM・テンペスト（Margaret Tempest: 1892-1982）等，歴代の挿絵画家とのトラブルに代表される，仕事仲間との軋轢はよく知られるところである。彼女が，唯一良き関係を作りえたのは，自らの創造した作品の中の，人間界から離れた，動物や妖精たちとの付き合いでのことであった。そこには，人間の作り上げる社会を頑に拒み，専ら自然の精霊（妖精）や動物たちとの交流の中に生きようとした，孤高の作家の姿が浮かび上がってくる。生活は全て，ロンドンに近いバッキンガムシャーのペンの村で営まれ，自宅の裏庭の延長線上に展開される，深々としたブナの森の中の幻の原風景—生まれ故郷北イギリスのダービシャーの田園—を背景に，半世紀にわたって，子ども向けの動物ファンタジーとタイムファンタジーの傑作，大人向けの自然のエッセイ集を書き続けた。彼女の作品を評して，ある者は「彼女の動物ファンタジーは，一種の妖精物語である」と言い，そしてまた他の者は「彼女は自分の持つ最良のものを，限られた小さい世界に閉じ込めて生きた，極めて個人的（private）な作家であった」と語っている。

1884年12月17日，記録的な大雪の中，北イングランドの寒村クロムフォード（Cromford）の，人里離れた丘の頂上にある一軒家，キャッスル・トップ・ファーム（Castle Top Farm）に生まれたアトリーは，自らを「雪の赤ん坊」（'Snow-baby'）と称して，自分の一生と雪とを常に結びつけて考えている。優れた知力と抜群の気力，そして体力にも恵まれた少女は，数々の奨学金を受けながら，マンチェスター大学の物理学専攻の学生となり，やがては大都市ロンドンでの教師生活を経て，エリート技師の妻となり，様々な限界を乗り越えながら，大きな世界へ羽ばたいてゆく。しかしながら，この一見，出世物語の主人公とも言うべき人生の裏で，少女の感じた孤独と屈辱の思いは深く，その一生の暗い影の部分を形作っていたことも事実である。特にこの作家が生涯にわたって連綿と綴った，明るく，暖かな動物ファンタ

ジーの世界の輝きを見るとき，そんな空想上の虚構の世界を描き出し，その光の中で，束の間の安らぎを得るほかなかった，複雑な作家の胸の内を考えざるをえない。幼年時代の思い出を背景に書かれた作品の中で，彼女は繰返しつぶやく，「ここに帰ってくれば，私は女王，全てに君臨することができるのだ」と。度重なる挫折の度に，この作家がその都度戻って行った心の故郷は，クロムフォード村の自然であり，追憶の中でのみ生きつづける親しい人々の懐であった。作家アトリーの創作の泉は，この小さな空間の中に，切ないまでに限られていたのである。その思い出の風土に，全ての神経と注意を集中しながら，物語のタペストリーを織り続けた作家，それがA・アトリーという人気ファンタジー作家の姿であった。彼女は，水・空気・土・太陽の光と風という，この地方の風土を形成する様々な自然の要素（精霊）に特別に選び取られ，愛された少女であった。そして彼女もまた，この自然の愛に答えるかの如く，持てる良き思いの全てを，創作物語の中に封印して，92歳の一生を全うしたのである。

彼女こそまさに，自らの思い出（memory）を生ききった作家であったと言えるだろう。

II　A・アトリーの「妖精物語」

1）　イラクサの上着と桜の花びらの衣装を縫いながら

アトリーの作品の中に，『ジョン・バーレーコーン』（*John Barleycorn*, 1948）という短編物語集がある。その中に収録された物語の一つ，「木こりの娘」（'The Woodcutter's Daughter'）は，彼女が熟知していた，このダービシャーの森を彷彿とさせるような妖精物語である。

森の奥深く，茅葺きの小屋に住む木こりの夫婦，夢見がちな夫と現実的な妻の間に，念願の子どもが授かった。まるで地上に降りた天使のような娘で，桜の花びらを思わせる白い肌，野性の森のサクランボウに似たピンクの頬をしていたため，「（桜の）花子」（'Cherry-blossom'），縮めて「チェリー（桜子）」（'Cherry'）と名付けられ，大切に育てられた。小さい頃から母親の手伝いに励み，深い森を抜けて学校に通い，夜は暖かい火の燃える暖炉の側に座って，森から切ってきた木の枝から，様々な動物の姿を刻む作業を続ける父親の語る伝説や民話の数々に耳を傾けた。そのお話の中には，かつて森に住んでいたドラゴンたち，空気中を飛び交う羽の生えた妖精たち，そして珊

瑚礁の海に住む人魚たちが登場した。女の子は，このような物語を耳で聞くことが出来る限りは，本を読みたいとも思わなかった。休みなく針を動かす母親の手仕事の傍らで，父親が低い声で語る物語に耳を傾けながら，小さな娘は，こうこうと輝く月の向こうに広がる深い森の中に住む，王子や妖精やエルフの姿を思い描いていたのである。

やがて，背も伸び，歳も増え，多分ちょっぴり分別がつくにつれ，このような妖精物語をその心の一角に隠すようになり，少女は村の学校を終えた。手元から放したくないという親の意向で，娘は家で縫い物の賃仕事をして，生計を助けるようになった。娘の仕立てる縫い物は，その綺麗な仕上がりが評判になり，次第に注文も増えてゆく。両親が床に就いたあと，夜なべの手を休めて，しばし暖炉に燃える炎を見つめるひとときが，娘の何よりの楽しみとなった。そして小屋の外で冷たい風が咆哮するある夜のこと，娘は炎の洞窟の中に，金色に輝く一頭の熊の姿を見るのである。

> The girl stared bewitched at the lovely wonder of it, fearing the beautiful beast would disappear like all the marvels of enchantment in the world of fire. But he stayed there, walking slowly through the gateway of the caves and under the arches of gold. Outside, the wind howled like a wolf, it snarled and snapped, and the forest whined back. The door shook, and the shuttered windows rattled and bumped as an icy blast swept through the crannies and caughed up the flames.
>
> —*Fairy Tales* chosen by Kathleen Lines (1975), pp. 13-4.

炎の中から歩み出てきた金色の熊は，娘に水と食べ物が欲しいと頼み，森の空き地に茂るイラクサで，自分のために一枚の上着を縫ってくれるようにと告げる。

その後熊はもう一度登場し，今度は娘に，同じ森の空き地に立つ桜の古木の花びらを集めて，婚礼衣装を縫うように告げる。いぶかしく思いつつも，娘は熊の要請に応えて針仕事に励んだ。やがて出来上がった二枚の衣装を持って，町まで注文取りに出かけた娘は，祖母の家に立ち寄った。若い日に，自分もまた，森の空き地で不思議な体験をしたことがあると語る祖母。そこには，ずっと昔，王の宮殿が建っていたのだそうだ。家への帰り道，空き地

の廃墟で焚き火をする娘の前に，手負いのあの熊が現われて助けを請う。そしていそいで火の中に入り，その桜の花びらの花嫁衣装を身につけ，イラクサの上着を着た自分と結婚してくれと頼むのだった。躊躇しつつも，熊の願いに従う娘。彼女は思い出していた，幼い頃，学校の行き帰りに，この空き地の廃墟で休むとき，いつも何処かから誰かに見つめられている思いがしたということを。こうして木こりの娘チェリーと熊の姿に変えられ炎の中に捕らわれていた王子，二人の恋人たちは，魔法の呪縛を解かれて結婚し，木こり夫婦と共に，森の空き地に再興された館で，幸せに暮らすだろうことを予見させて，物語は結ばれている。

> He put his arms around her, and down upon their heads fell shower of snow which was cherry petals. The cherry trees in the grove were in flower again that winter's day. The turtle dove cooed in the boughs of the yew tree, and a charm of goldfinches flew across the open chamber. Together the bear-man and Cherry-blossom walked out into the moonlit wood, to the thatched cottage of the old people. They looked back, and in the place of the cherry wood stood a great house, white as snow, shining like fire, with a yew tree rising from its walls.
>
> —ibid., p. 31.

しかし，ここに描かれている「イチイの木」（'a yew tree'）の存在は，なにか不吉な余韻を残す。元来イチイは，墓場に植える常緑樹であり，黄泉の国を示唆する木である。してみるとこの物語は，ただ単に，おとぎ話の定石の幸せな結末を謳歌するばかりはなく，以後人間界を離れ，妖精たち（死者も含む）の住む異界に暮らすようになる娘の，この世での生命の終わりを意味しているのかも知れないからである。

2） 風に愛された娘—此岸と彼岸の二人の恋人たちの間で

一方，『靴職人の店』（*The Cobbler's Shop*, 1950）という短編集の中に含まれている「風が愛した少女」（'The Girl whom the Wind Loved'）という物語は，この世の若者ロビン（Robin）と，自然の要素の一つである「風」（'Wind'）という超自然的恋人の間で，揺れ動く娘の物語となっている。

冷たく，星も出ない，灰色の冬の夕べ，たった一人年老いた祖母の待つ，森の中の小屋へ急ぐ少女の姿があった。朝早く，自分を雇ってくれている農家へ出かけ，一日中乳搾り，床磨き，そして鍋釜を擦っての雑用をこなして，夕方遅く帰路につく毎日であった。腕には，暖炉にくべる薪と，農家のおかみさんが持たせてくれた心づくしの食料が抱えられている。夕食の準備をしながら，一日の出来事を，祖母に話して聞かせる少女。農場の仕事はきつかったが，そこには小さな喜びもあった。何よりも，親切な農家の息子が，なにくれとなく彼女の仕事を手伝ってくれることが嬉しかった。けれど祖母の病は日に日に重くなり，少女の将来を案じつつ，死の国へと旅立ってしまう。たった一人残された少女のところに，やがて不思議な訪問者が訪れるようになる。毎晩暗闇の中から，薄く高く，葦のような声が聞こえてくるのである。そして，天使のようにはっきりと，蜜のように甘く，妖精の誘うような声で呼びかける。それから小屋の回りを毎夜巡りながら，「風花よ！風花よ！私と一緒においで。出ておいでよ，美しい人！私は風だよ！」（'Windflower! Windflower! Come away with me. Come out, beautiful one! I am the wind!'）と誘うのである。すると娘は，外套をまとい，小屋に錠を掛け，ポケットに鍵を偲ばせて，風の誘いに応えて外に出て行く。娘は以前から，風が大好きだったからである。

> The wind blew her cloak tightly around her, and it wrapped her warmly in its folds. It put a strong arm to support her, so that, although it was now blowing with great force, she moved like a leaf caught in the embrace.
>
> Her feet scarcely touched the ground as the wind blew her along, swinging her safely away from trees and walls and obstacles. Her cheeks glowed in the wind's breath, her hair was caught up and it flew like a cloud around her head. Her eyes were shining like stars with the excitement of the rapid motion, and she leaned back against the powerful arms that upheld her and smiled up at the sky with its planets and moon. She was no longer a girl but a part of Nature, aware of feelings and movements outside her life.
>
> —ibid., p. 159.

このとき娘は，もはや小さな女の子ではなく，「自然」（'Nature'）の一部となって，毎晩風との逢瀬を楽しむ女性へ変身していたと描かれている。風は田園の上を飛びながら，この地に繰り広げられた様々な出来事を娘に見せてくれる。中には，あの悲劇の女王，スコットランド王妃メアリーの姿もあった。しかし，このような風との夜の逢い引きを重ねるに連れ，娘の実体は希薄さを増し，幽鬼のようになってゆく。娘の変化に先ず気がついたのは，農家の息子ロビンだった。「どうしたのメアリー（Mary），君の目には今まで僕の見たことのないような表情が浮かんでいる。何が起こったというんだい？」と気をもむ若者。答えに窮し，「風花」とは一体どんな花かと問う娘に，若者は，「森の中で白い花を咲かせて揺れる，三月と四月の花，森のアネモネ（wood anemone）さ。君はあの風花に良く似ているよ，メアリー」と答えるのであった。そして「君は風を見た人のように見える」（'You look like one who's seen the wind.'）とも続ける。そして「風を見た人は，過去と未来を見ると言われているんだ。この世の人ではないんだって」と言う。やがて，誰もが娘の異常な様子に気がつくようになった。「あの子は，何かに取りつかれてしまっている。放っておおき，もうお前の相手ではないよ。あの子は妖精っこ(fey）に違いない。多分妖精の男か，地上にもどってきた昔の種族の誰かと会っちまったんだろうよ」と言う母親の助言にもかかわらず，必死に娘の気持ちを取り戻そうとするロビン。やがて風は，激しく娘に訴え，しきりに結婚を迫るようになった。今始めて明かされる，自然の持つ脅威の一面である。

> 'Choose, Windflower,' sang the wind, and its voice had lost its beauty and become loud and wild as it beat against them and tore their clothes and lashed their faces, so that they clung all the tighter to each other. Mary hardly knew the wind in this guise. All its gentleness and fragrance had gone; it was hard and primitive and cruel.
>
> 'Which of us will you marry?' screamed the wind. 'An earth-man who will live with you in a cottage and give you pain and sorrow, old age and death, or the wind who will carry you to the mountain-tops and make you an immortal? You shall never die if you marry me. You will see all the world—the hot deserts of Africa, the Jungle of India, the ice-field of the

Arctic, the fields of fairy—and you will have everlasting bliss. Which will you have, my love or his?'

—ibid., p. 169.

一方，ロビンも娘に語りかける，

'I can only give you my love, and work and homely things. I can give you children to bring up and cattle to tend, and a house to keep, and a simple garden to sit in. I can give you laughter and tears, and we shall be poor, but also we shall be rich. Which of us will you choose, Mary, my love?'

—ibid., p. 169.

結局，娘は，子供たちと家畜，ロビンの約束する地上の愛を選んだのだった。急に鳴りを潜め，消えてゆく風。後には，渦を巻いて天に上って行く「空気の一息」('breath of air') が残るのみであった。

その後，ロビンとメアリーの間に，子供が生まれる。しかし時々，小屋の回りを巡って「風花！風花！」と呼ぶ風の声も聞こえてきた。子供もたちは声を合わせて叫ぶ，

'Hark to the wind,' they laughed, sung by the fire. 'Hark. It wants to carry off our mother, but she won't ever go. We are holding her tight.'

High up in the air the wind sang its songs, luring them and enchanting them, and then it went, for it had no more power over earth-love.

—ibid., p. 170.

3) 雪むすめ—北風と結ばれて

他にも，同じく地上の若者と自然の要素の化身である北風の間で揺れ動く，娘の物語がある。しかしこの場合，娘自身も普通の生身の人間ではなく，雪から作られた像となっている。「雪むすめ」('The Snow Maiden') というこの物語は，『芥子，胡椒，そして塩』(*Mustard, Pepper and Salt*, 1938) という短編物語集に収められた作品である。

北極の近く，北の彼方の国に，霜の王（Frost King）と氷の女王（Ice Queen）が治める国があった。二人はお互いに深く愛し合っており，国は平和で，何一つ不満がないようであったにもかかわらず，このところ言い知れぬ淋しさが，二人の心を去来するようになる。それはこの国のどこにも，子供の姿が見られないことであった。二人の身辺に，老いの影が深く垂れ込めてくるにつれて，子供を持ちたいという願いが募るようになる。この北の国で，ただ一人遠く旅をしては，広い世界の情報を提供していたのが，北風の精であった。彼は早速，二人に相応しい子供を求めて，全世界を巡った。一方，イングランドの片田舎では，クリスマスの前夜，二人の男の子たちが折しも積もった新雪を使って，雪だるまならぬ，雪むすめ作りに励んでいた。中でも金髪と青い瞳をした芸術家肌の兄は，娘の像作りに没頭し，巻毛に真っ赤なベリーと白いヤドリギを差して仕上げを施した後，像に心を残しながら，暖かい家の中へ立ち去って行く。丁度そのとき，北風が通りかかり，家の外に一人立ち尽くしている，雪むすめの姿を目にとめた。

> As he stepped across the orchard, grumbling to himself with a voice of thunder, scowling like a black storm, glancing angrily at the closed doors and windows of the house, he saw the child. She was exquisite and pure as the newly-fallen snow, she stood under the trees, motionless, wistful, with eyes blank and lips unsmiling, yet curved as if the white-rose mouth would open and speak. Her head was slightly turned towards the house, whence came shouts of joy, and she seemed to be listening to one voice above others.
>
> —ibid., p. 110.

北風は，この雪の娘の像に，生命の息吹を吹き込んでやった。それから，なおも家の中に，自分を作ってくれた少年の姿を求めようとする娘を軽々と抱き抱えると，霜の王と氷の女王の待つ，北の国へと帰って行ったのである。

願いかなった王と女王は狂喜し，この雪のむすめを，自分たち二人の子供として慈しみ，国中に若さと喜びが満ちるようになった。しばらくは何の問題もなく，平和の日々が続いた。けれどある日のこと，北風が南の国から持ち帰った，白と赤の実を飾った真珠色のヒイラギのリースの冠を頭に載せた

娘の胸に，激しい痛みと憧れが蘇ってくる。再び旅に出かけようとする北風に，娘はもう一度だけ，自分が作られたイングランドの国へ連れて行ってくれるようにと哀願する。そしてその故郷で，娘が目にしたのは，もはや形をすっかり変えてしまった田舎の家とそこに住む老婆の姿であった。彼女の二人の息子のうち，弟の方は死んでしまい，彫刻家となって名を上げた兄息子の方は，大都会へ出て行き，老いた親のことをかまおうともしなくなっていたのである。このような現実に触れて絶望し，義母と義父の王夫妻から，厳しく禁止されていた，あの「火と呼ばれる赤い花」（'red blossom called Fire'）の方へ，思わず歩み寄る雪むすめ。

傷心の娘の命を救ったのは，彼女の姿に目にした瞬間から，娘を愛し続けていた北風であった。そして物語は次のように結ばれる。

> Shortly afterwards she became the wife of the North Wind, to live for ever in the land of ice and snow. There she is Queen, for her foster-parents wished her to reign in their stead. In the ice-blue corridors run a troop of little children, wild as their father, strong as young giants, but their eyes are blue like their snow-mother's, and their voices are sweet as hers. Some people call them Zephyrs, when they fly over the lands with their father, the North Wind, and creep from under his cloak to play in the orchard, but that is wrong. They carry snow in their hands, and their strength is hidden. They are true sons of the North Wind, as anyone knows who sees them playing in the mountains.
>
> —ibid., pp. 117-8.

この雪むすめこそ，自らを「雪の赤んぼう」と呼んだ，アリスン・アトリーという作家自身，そし西風「ゼファーズ」（'Zephyrs'）は，彼女が生んだ子供たちと言うべき，数々のファンタジーの作品ではなかろうか。そして春を告げる暖かい西風に象徴されるような彼女の作品を，つくづく味わうときに感じる冷たい感触，それは，生涯雪を芯に抱えた作家の心であったように思われる。そしてまさにこの雪のように白く，冷たく，硬質な心こそが，夏でも身を切るような北風が吹く，北イングランドのダービシャーの風土が生んだ，作家魂そのものなのである。

アトリーは自らの妖精物語のねらいを，「新しい目で日常をみるようになることにある」と述べ，次のように語っている。

> 'So each and every tale holds everyday magic, and each is connected with awareness of everyday life, when reality is made visible, and one sees what goes on with new eyes.'
>
> —*The Little Knife Who Did All the Work* (1962), 'Postscript', p. 119.

Bibliography

I 'Fairy Tales' by Alison Uttley

1. *Moonshine and Magic,*
illustrated by Will Townsend, (Faber, London, 1932)
2. *Candlelight Tales,*
illustrated by Elinor Bellingham-Smith, (Faber, London, 1936)
3. *Mustard, Pepper, and Salt,*
illustrated by Gwen Raverat, (Faber, London, 1938)
4. *Nine Starlight Tales,*
illustrated by Irene Hawkins, (Faber, London, 1942)
5. *Cuckoo Cherry-Tree,*
illustrated by Irene Hawkins, (Faber, London, 1943)
6. *Mrs. Nimble and Mr. Bumble,*
illustrated by Horace Knowles, with *This Duck and That Duck,*
by Herbert Mckay, (Francis James, London, 1944)
7. *The Spice Woman's Basket and Other Tales,*
illustrated by Irene Hawkins, (Faber, London, 1944)
8. *The Weather Cock and Other Stories,*
illustrated by Nancy Innes, (Faber, London, 1945)
9. *Some Moonshine Tales,*
drawings by Sarah Nechamkin, (Faber, London, 1945)
10. *John Barleycorn: Twelve Tales of Fairy and Magic,*
illustrated by Philip Hepworth, (Faber, London, 1948)
11. *The Cobbler's Shop and Other Tales,*
illustrated by Irene Hawkins, (Faber, London, 1950)
12. *The Little Knife Who Did All the Work: Twelve Tales of Magic,*
illustrated by Pauline Baynes, (Faber, London, 1962; Puffin, Harmondsworth, 1978)
13. *Enchantment,*
illustrated by Jennie Corbett, (Heinemann, London, 1966)
14. *Lavender Shoes: Eight Tales of Enchantment,*
illustrated by Janina Ede, (Faber, London, 1970)

II Anthologies

1. *Magic in My Pocket: A Selection of Tales,*
   illustrated by Judith Brook, (Penguin, London, 1957)
2. *Fairy Tales,*
   chosen by Kathleen Lines,
   illustrated by Ann Strugnell, (Faber, London, 1975)
3. *From Spring to Spring,*
   chosen by Kathleen Lines,
   illustrated by Shirley Hughes, (Faber, London, 1978)
4. *Foxglove Tales,*
   chosen by Lucy Meredith,
   illustrated by Shirley Felts, (Faber, London, 1984)